

第18回 北海道特別支援教育学会

令和6年度 旭川研究大会

Hokkaido Academy of Special Needs Education

環境に限定されない支援とは何か？

～見えにくい特性や困難性のライフステージを通した気づきと支援～

期 日 令和6年度10月6日（日）研究大会

会 場 旭川市民文化会館

〒070-0038 旭川市7条通9丁目

主 催 北海道特別支援教育学会

共 催 日本自閉症スペクトラム学会北海道支部

後 援 北海道教育大学
北海道教育委員会
旭川市教育委員会
北海道特別支援学校長会道北支部
北海道特別支援学校副校長・教頭会道北支部

令和6年度 第18回北海道特別支援教育学会研究大会

—開催要項—

特別支援教育は個人のニーズに対する適切な教育的支援であり、その実施に関しては環境の違いを問わないことが前提となっています。ユニバーサルな教育的アプローチもかなり推進されてきていると思いますが、現実的にすべての子どもにとって教育環境は同じというわけにはいきません。したがって、特別支援教育に携わるわれわれは現在、ユニバーサルな方向性と同時に、さまざまな教育環境を包括的にとらえる実践を試みなければなりません。本年度旭川で開催されます第18回研究大会では、多様な教育環境に対応可能な教育的アプローチについて参加される方々と考えていきたいと思っております。学校規模ポジティブ行動支援（SWPBS）は、このような教育的アプローチの中ではエビデンスによって効果が認められたベスト・プラクティスとみなされる手段であり、この分野のリーダー的存在であります大久保賢一先生に本大会の基調講演をお願いいたしました。SWPBSの視点と手段は、われわれの日々の実践にすぐに応用可能です。本大会は1日のみのプログラムではありますが、国際的最先端の教育アプローチや行政の最新情報など、ポジティブな内容となっております。特別支援教育に関わるさまざまな職種の方々のご参加お待ちしております。

第18回大会長 萩原 拓

日程 10/6（日） 研究大会

9:30~	10:30~12:00	12:15~12:45	12:45~13:15	13:15~15:15	15:15~15:45	15:45~17:30	17:30
受付	大会企画 シンポジウム①	理事会 ポスター発表	総 会	基調講演	休憩	大会企画 シンポジウム② 自主シンポジウム	閉 会 式

大会参加費

学会員 2,000 円 日本自閉症スペクトラム学会員 2,000 円 一般参加 4,000 円
学生 1,500 円 （*当日、学会員になることも可能です。詳細は p15 をご覧ください。）

理事会のご案内

6日（日）の12:15から理事会を3階第5会議室で開催致します。役員の皆様はご出席をお願い致します。

総会

6日（日）の12:45より総会を3階大会議室で行います。学会員の方はご出席ください。

プログラム

■ 研究大会/ 6 日 (日)

●●●【基調講演】 (3F 大会議室)..... 13:15~15:15

『学校規模ポジティブ行動支援 (SWPBS) の理論と実践』

畿央大学 現代教育学科 教授 大久保 賢一 氏

本講演では、学校規模ポジティブ行動支援 (SWPBS) の理論と実践について解説します。SWPBS は、子どもたちの望ましい行動を育て、行動面の問題を予防あるいは解決するための包括的なアプローチです。SWPBS は、1) 応用行動分析学、2) 階層的な支援モデル、3) データに基づく意思決定、4) チームアプローチ、という 4 つの柱から成り立っていますが、それぞれについて詳しく解説します。

まず、ポジティブ行動支援の基礎として応用行動分析学の理論を紹介し、その重要性を説明します。次に、階層的な支援モデルについて、第 1 層支援、第 2 層支援、第 3 層支援の各段階でどのように支援を提供するかを具体的に述べます。また、データに基づく意思決定のプロセスでは、データの収集方法や分析手法、そしてそれをどのように活用して効果的な支援を行うかを解説します。

チームアプローチの重要性についても取り上げ、学校内外の関係者がどのように協力して SWPBS を実施するかを探ります。ここでは、校務分掌の役割分担や教育委員会との連携についても触れ、効果的なチーム作りのポイントを具体的に説明します。さらに、国内外の学校での実際の事例を通じて、具体的な実践方法や導入ステップ、そしてその成果について紹介します。実際の成功事例を基に、どのようにして SWPBS が生徒の行動改善に寄与し、学校全体の環境を向上させるかを示します。

最後に、現在の課題と今後の展望について議論します。SWPBS の実施における障壁や改善点を洗い出し、持続可能な支援システムの構築に向けた具体的な対策を検討します。

講師プロフィール 大久保 賢一 先生



【現職】

畿央大学 現代教育学科 教授

畿央大学 教育学研究科 教授

一般社団法人 日本ポジティブ行動支援ネットワーク 代表理事

【専門】

特別支援教育

応用行動分析学

Positive Behavior Support

【略歴】

2004 年-2010 年 筑波大学大学院, 人間総合科学研究科, 心身障害学専攻 博士課程

2008 年-2014 年 北海道教育大学, 教育学部旭川校, 准教授

2014 年-2021 年 畿央大学, 教育学部, 准教授

2021 年-現在 畿央大学, 現代教育学科, 教授

2021 年-現在 畿央大学, 教育学研究科, 教授

【主な著書】

大久保賢一：生徒指導に活かす「ポジティブ行動支援」．LD ADHD&ASD, 42-43, 明治図書, 2021

大久保賢一：3 ステップで行動問題を解決するハンドブック：小・中学校で役立つ応用行動分析学．学研教育みらい,学研プラス, 2019

●●●【大会企画シンポジウム①】(3F 大会議室)... 10:30~12:00

『こども及び障害児施策に関する国の動向』

報告者：厚生労働省 社会援護局障害福祉部企画課 課長補佐 中山 美恵 氏
「療育手帳に係る判定基準統一化の検討進捗報告および実施協力について」
報告者：こども家庭庁 支援局障害児支援課 障害児支援専門官 杉本 拓哉 氏
「これからのこども政策について」
コーディネーター：北海道教育大学旭川校 教授 萩原 拓 氏

本シンポジウムでは、厚生労働省及びこども家庭庁で業務をされている中山美恵先生、杉本拓哉先生にお越しいただき、国の障害児施策に関する動向に関してお話しをしていただきます。

厚生労働省では、現在、療育手帳に係る判定基準統一化が検討されています。知的障害の診断基準は、知能検査と適応行動の双方の評価に基づいて実施されています。しかしながら、児童相談所等での判定は知能検査のみを使用していることが少なくありません。知能検査の内容も田中ビネー検査やウェクスラー式知能検査など一貫していない現状が窺えます。これらの検査は検査時間が1時間以上かかる場合もあり、判定を要する件数を踏まえると、適応行動の検査を追加で実施することが難しい現状もあります。厚生労働省の中山先生にはこの現状についてご説明いただくとともに、現在の取り組みについて解説をしていただく予定です。

こども家庭庁では、「こどもまんなか社会」の実現のため、従来の保健、福祉、教育をまたいだ様々な政策が実施されています。障害福祉サービスについても政策が進められており、児童ディサービスや障害者支援センターの業務の方向性についてもこども家庭庁で政策が決定されています。令和6年度に障害福祉サービス等報酬改定が実施されました。杉本先生には、改定の趣旨や経緯などを解説していただき、障害福祉をめぐる全国的な動向などについてもお話しをいただく予定です。

●●● 【大会企画シンポジウム②】(3F 大会議室).... 15:45~17:30

『学校・園や地域単位での行動支援の現状』

報告者：学校法人旭川宝田学園めいほう幼稚園	園長	山本 健太 氏
報告者：東川町立東川小学校	教諭	井口 貴道 氏
報告者：美瑛町教育委員会	参事	目良 久美 氏
指定討論：畿央大学現代教育学科	教授	大久保 賢一 氏
コーディネーター：北海道教育大学旭川校	教授	片桐 正敏 氏

特別支援教育は、時代の変化に伴い、様々な環境で育つ多様な特徴を持った子どもが対象となってきています。診断の有無に関わらず適応や学習に課題を抱える子ども、その家族のニーズに対してこれまでのように個人の資質だけでは対応し切れない段階に直面してきています。そのため大会企画シンポジウムでは北海道において、組織的にこれらのニーズへ対応することが可能か、特に行動支援の取り組みの現状と課題に焦点を当てます。多様なニーズを抱える幼児・児童・生徒、その家族に対して、学校・園や地域の行政の現場に関わっている方々に情報提供いただきます。また、指定討論の大久保賢一先生には、各先生から報告いただいた、園や学校、地域の現状に深く切り込んでいただく予定です。職種や立場に関係なく交流できることが、本学会の目指すところです。乳幼児期から義務教育段階のさまざまな支援に関わっている方、ご家族、当事者など、旭川大会のテーマに興味や関心を持たれていらっしゃる方々、ぜひご参加ください。

■ 研究大会/ 6日(日)

●●●【自主シンポジウム①】(2F 第2会議室).... 15:45~17:30

『子どもを中心とした学校作業療法の実践と展望』

司 会 郡司 竜平 氏(名寄市立大学 保健福祉学部社会保育学科 准教授)

話題提供者 秋谷田結奈 氏(医療法人一視同仁会 札幌・すがた医院 作業療法士)
小玉 武志 氏(北海道済生会みどりの里 作業療法士)
池田 千紗 氏(北海道教育大学札幌校 特別支援教育専攻 准教授)
山下 公司 氏(北海道教育大学札幌校 特別支援教育専攻 准教授)
田畑 牧子 氏(小樽市立朝里小学校 教頭)

特別な教育的ニーズを持つ子どもたちが過ごす場や利用するサービスは多様化しており、その支援を充実させるためには多職種連携が欠かせません。特に、子どもの生活を支える作業療法士は、医療機関での個別作業療法、児童発達支援や放課後等児童デイサービスでの療育を通じて、教員と密に連携しながら実践を行っています。最近では、保育所等訪問支援といった福祉サービスを利用し、作業療法士が直接学校に訪問して教員と連携する機会が増えています。

このような学校での作業療法士の取り組みは「学校作業療法」と呼ばれ、他県でも広がりを見せていますが、北海道には独自の課題があります。過疎地や離島における支援の受けづらさ、また人口密集地域での支援の選択の難しさがあり、これらの地域特性に応じた支援システムの構築が求められています。

本シンポジウムでは、作業療法士からは医療と福祉の立場からの実践報告と、教員が作業療法士を活用しやすくなるための新たな取り組みについて紹介します。教員からは、作業療法士との連携の実践例として特別支援学級やまなびの教室での取り組み、学校全体でのシステム構築に関する報告を行い、今後の展望について議論を深めることを目的としています。

●●● 【自主シンポジウム②】(2F 第3会議室).... 15:45~17:30

『盲学校と通常の学校が連携した読み書き支援
アセスメントから具体的な支援について』

企画者・司会 脇坂 文貴 氏 (旭川市立東光小学校 教諭)

話題提供者 逢坂 一伸 氏 (北海道旭川盲学校 特別支援教育コーディネーター)
加藤 雅子 氏 (旭川市立第三小学校 特別支援教育コーディネーター)
高木 美和 氏 (旭川市立東光小学校 教諭)

文字の読み書きに困難さを示す児童生徒は、特別支援学級だけでなく通常の学級にも在籍している。文字の読み書きの困難さは様々な学習に影響を与えるが、適切な支援が行われず本人の努力不足ととらえられたり、児童生徒自身も努力の割には改善されないことで学習への意欲が低下したりする可能性もある。教師が、読み書きの困難さが本児の特性による可能性を感じていても、どのようにアセスメントし支援につなげるか悩みを抱えているケースもある。

本シンポジウムでは、読み書きに困難さのある児童生徒について、盲学校の教育相談でのアセスメントを活かし、通常の学校で支援を行った事例を通して、学校間で連携した支援について考えてみたい。

ポスター発表 12:15~13:15 2F 第3会議室

1 保育者を志す学生が特別支援教育実習で学びたいこと-実習事前指導を通じた変化-

奥村香澄（名寄市立大学保健福祉学部社会保育学科）

郡司竜平（名寄市立大学保健福祉学部社会保育学科）

（要約）

保育者養成校における特別支援教育実習において、保育者を志す学生が学びたいことについてのアンケート調査を行った。KH コーダーによる対応分析の結果、事前指導を受ける前後では、学びたい内容の質的な変化が表れており、事前指導を受けることによって、学びたいことがより具体的になったと考えられた。また、共起ネットワーク図からは、事前指導の前では学びたいことが多岐にわたっていたものの、事前指導の後では「子どもとの関わり方」、「実態把握の仕方に応じた指導」、「障害や教育への学び」、「指導案の書き方」の4つまで収束された。このことから、事前指導にて実習中の学びを可視化することによって、より目的意識をもって実習に挑むことができると考えられた。

2 教師の応答的かかわりによる重度重複障害児の表出行動の変容

中村龍平（北海道余市養護学校）

細谷一博（北海道教育大学函館校）

（要約）

近年、医療技術の進歩により、特別支援学校に在籍する児童生徒の重度・重複化が指摘されている。重度重複障害児の意思や要求を読み取ることは難しく、彼らの表情や身体の動きを観察し応答的なかかわりをすることで、表出行動が増加することが報告されている。そこで、本研究は、特別支援学校小学部に在籍している表出が微細な重度重複障害児の指導場面において、教師が応答的かかわりを継続的に行い、対象児の表出の変容について検討することを目的とした。その結果、対象児の表出は増加した。このことから、重度重複障害児は、自らの表出に新たな反応や刺激が得られる体験をすることで、外界や他者に気付き、やりとりを広げられると考えられる。

3 個別最適化した絵本を用いた絵本読み活動支援：地方自治体との取り組み

小林哲生（NTT コミュニケーション科学基礎研究所）

樋口大樹（NTT コミュニケーション科学基礎研究所）

（要約）

幼児への絵本の読み聞かせは、言語発達にポジティブな影響を及ぼすことが知られており、全国各地の自治体で0歳児への絵本の無償配布事業がさかんに行われている。ただし、1歳以降になると、絵本の読み聞かせを支援する試みは少なくなり、家庭での読み聞かせ活動の習慣化を達成するには、継続的な支援が望まれる。そこで本研究では、子ども一人ひとりの言語発達と興味に基づいて作成した個別最適化した絵本（パーソナルちいくえほん）を作成し、言語発達の個人差の大きい1歳台の子どもに自治体を通じて配布する実証実験を行った。本発表では、こうした実証実験の内容と、養育者に行ったフォローアップ調査の結果について報告する。

4 社会人基礎力の視点を基にした振り返りを通して、資質・能力の確実な定着を目指す

～札幌あいの里高等支援学校普通科総合的な探究の時間の実践～

新山佳奈（札幌あいの里高等支援学校）

解良和人（札幌あいの里高等支援学校）

（要約）

VUCAの時代を迎え、これからの時代に求められる資質・能力を身に付けることは重要である。AARサイクルをベースとした実践について、社会人基礎力の視点で振り返りを行うことで、学びの自己調整力を高めることができると考える。本校普通科総合的な探究の時間の「短期インターンシップ・ワークシステム」单元について、ねらいや指導のおさえ、ICTを活用した評価方法等を紹介すると共に、具体的な生徒の変容についてもまとめて発表する。

5 ASD 傾向児と定型発達児における適応機能と IQ の関連:

浜松母と子の出生コホートにおける Vineland- II と WISC-IV の分析から

近藤みゆき (NTT コミュニケーション科学基礎研究所)

篠原亜佐美 (NTT コミュニケーション科学基礎研究所)

樋口大樹 (NTT コミュニケーション科学基礎研究所)

小林哲生 (NTT コミュニケーション科学基礎研究所)

西村倫子 (浜松医科大学)

岩淵俊樹 (浜松医科大学)

土屋賢治 (浜松医科大学)

(要約)

自閉スペクトラム症(ASD)児では、社会生活を営む上で重要な適応機能に困難を示すことが指摘されており、適応機能と認知機能 (IQ) の正の相関が確認されている。しかし、適応機能と IQ の関連が ASD 児に特有のものは未解明である。本研究では浜松母と子の出生コホートの 8-9 歳時点における ASD 傾向児と定型発達児のデータを用い、Vineland- II で測定された適応機能と WISC-IV で得られた IQ との関連に ASD 傾向が与える影響を分析した。その結果、ASD 傾向児の適応機能は低い、IQ が高いほど適応機能が高いという関連は両群で見られた。併せて、近年 ASD で指摘されている適応機能と IQ の乖離について検討したところ、ASD 傾向児では定型発達児と比較して乖離が大きいことが示された。

6 発達障害傾向のある高校生の内在化問題と養護教諭の対応

戸田竜也 (北海道教育大学釧路校)

(要約)

昨今、高校段階にある発達障害の生徒(未診断の「傾向者」を含む)の内在化問題や不登校の増加が指摘されている。高校では、個々への支援だけでなく、教務規定の変更やピアカウンセリングの実施等、さまざまな対応を行っている。北海道 2 教育局管内の高校養護教諭を対象とした面接調査から、高校において顕在化する症状等と養護教諭の具体的な対応の状況について報告する。

7 特別支援学校における数学的活動の楽しさに気付くためのアナログとデジタルを融合した学習活動

～Osmo を用いて～

古谷太一（北海道札幌伏見支援学校）

郡司竜平（名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科）

（要約）

本実践は、高等部2年生男子1名（以下生徒A）と高等部3年生男子1名（以下生徒B）を対象とした。生徒の実態は、2名とも学習に意欲的で積極的に取り組むことができるが、生徒Aは質問の理解や数のまとまりに、生徒Bは作文や空間認識能力に課題がある。日常の国語や数学の学習では、指導者が正解や不正解を伝えていたため、生徒たちの自主的な気付きを促せていなかった。そのため、アナログとデジタルを融合した教材であるOsmoを使用し、生徒たちが具体物を操作しながらタブレットに出るヒントをもとに体験的に学べるように取り組んだ。Osmoを使用した学習では、生徒たちは主体的に活動し、数学的活動の楽しさに気付きながら、学習の定着や向上を図ることができた。

8 重度の肢体不自由児に対する学習課題と生活課題の環境設定の工夫

小柄愛（北海道済生会みどりの里）

小玉武志（北海道済生会みどりの里）

（要約）

重度の肢体不自由児者には本人の行いやすい環境支援と、本人の動作の特性に合わせた活動支援が必要である。これらの環境支援と活動支援における作業療法士の活動や動作を分析する視点や評価に基づく工夫は、肢体不自由の児童生徒が在籍する学校の学習指導や給食などの生活上の指導といった場面において、指導効果をより高めることに役立てると考える。本ポスターでは作業療法士の活動や動作を分析する視点や評価に基づく工夫について、当施設に入所されている重度の肢体不自由者の食事設定、当施設に入所されている特別支援学校の訪問学級に在籍する重度の肢体不自由児の学習時の環境支援と活動支援などについて発表する。

9 年長児のひらがな読み習得の地域差

樋口大樹 (NTT コミュニケーション科学基礎研究所)

小林哲生 (NTT コミュニケーション科学基礎研究所)

(要約)

国立国語研究所が、1967 年に 2,217 名の未就学児に対して行ったひらがな読み書き習得調査によれば、年長児の秋の段階でひらがな清音、濁音、半濁音をかなり正確に読めることが報告されている。ただし、この調査では東京、近畿、東北地方のみを対象としており、北海道や九州、沖縄などのひらがな読み習得実態は調査されていなかった。我々は、北海道、東京都、神奈川県、島根県、沖縄県と様々な地域の年長児のひらがな読み習得状況を調査し、地域により習得度に大きな差がある可能性を見出した。本発表では、年長児を対象とした調査結果とともに、家庭での読み聞かせ頻度などの環境要因に関する結果も報告し、これらの地域差を生み出す要因を議論したい。

10 小学生の障害に対する潜在的態度に関する調査

越智美雨(札幌市立東光小学校)

細谷一博(北海道教育大学函館校)

(要約)

障害理解教育を行う上で子どもたちの態度や認識を把握することが必要であり(田名部・細谷,2019)、特に年齢の低い段階だと障害者に対する否定的な態度の影響を処理する能力が未熟であるとされている(河内,1993)。そのため本研究では、回答者のバイアスがかかりにくい潜在的態度に注目し、FUMIE テストを用いて、小学生の障害に対する潜在的態度を把握し、その傾向について明らかにすることを目的とした。その結果、小学 6 年生は小学 5 年生よりも障害者に対して肯定的な潜在的態度を持っている傾向が示された。今後は学年間の潜在的態度に及ぼす要因について明らかにする必要がある。

11 保護者・研修実施者双方の評価に基づく、ペアレントプログラムの効果の検討

野原茉紘（北海道教育大学旭川校）

蔦森英史（北海道教育大学旭川校）

（要約）

ペアレントプログラムの効果検証はこれまで受講者である保護者の主観的評価に基づく研究が多かった。保護者自身が自己認知できていない場合でも、他者から観察すると子どもに対する関わりや考えに変容が見られる場合も考えられる。対象者は就園以降の子どもの保護者が多かった。未就園の子どもの保護者は、子どもと1対1で過ごす時間が長く、保育士や教員との接点のある保護者よりも抱えている問題が深刻であることも少なくない。本研究は未就園の2-3歳の保護者を対象に、保護者、研修実施者双方にインタビューを実施した。介入前後に保護者へ質問紙を実施し、抑うつ、養育行動、ストレス、子ども困難さの変容を調査した。本発表では介入前後の質問紙調査の結果を報告する。

★自主シンポジウムについて

1. 10月6日(日)のシンポジウムに関する打合わせは、1Fのフロアか2Fの第2会議室を使用してください。
2. 発表等の時間配分は企画者にお任せしますが、制限時間は厳守して下さい。各教室にはプロジェクター等のAV機器が整備されています。HDMIケーブルを準備しております。
3. PCは各自で持参下さい。機器の操作は各自でお願いします。
4. 映像は、ファイルにしてPCによる再生をお願いいたします。
5. 配布資料がある場合は各自で印刷をお願いいたします。
6. 第3会議室は適宜機の配置を変えて使用してください。終了後は現状復帰をしていただきますようお願い致します。
7. 第3会議室はマイクを設置しておりませんのでご了承ください。
8. 第3会議室のプロジェクターはプロジェクターから音声が出ません。映像を流す場合はPCから音声を流すようお願い致します。

★ポスター発表について

1. ポスターは大会当日の発表に加えて、後日オンデマンド上でも閲覧できるようにします。オンデマンド上の公開は準備が出来次第アナウンスいたします。
2. ポスター発表者は、ポスター発表前日(10月5日(土))までにポスターデータをPDFにして大会実行委員会までお送りください(送り先: sen.dohoku@gmail.com * → @)。
3. ポスターはA0サイズでご準備ください。
4. ポスターの発表会場は2Fの第3会議室です。
5. 発表者は10:00~10:30までに第3会議室の入り口でポスター用の受付を済ませ、発表パネルに掲示をしてください。画鋏を用意しておりますので、それを利用してパネルに掲示をお願い致します。
6. パネルの上部左側の発表番号に従ってそれぞれポスターを掲示して下さい。発表番号は、この2号通信に記載されているポスターの番号になります。
7. ポスター上部に題目・発表者名・所属を記載して下さい。文字は読みやすい大きさに印刷して下さい。
8. 在籍責任時間は特に定めませんが、12:15~13:15の発表時間内になるべく多くの質問者に答えていただけるよう、お願いいたします。
9. ポスター撤去は発表終了後直ちに行ってください。撤去は発表者が責任を持って実施してください。
10. 第3会議室は午後の自主シンポジウムで使用致します。撤去されないポスターは大会事務局で破棄いたします。
11. オンデマンドに掲載したポスターに関しては、質問に対する回答の義務はありませんが、可能な範囲でお答えください。

★昼食について

- 昼食は各自でご用意ください。大会議室を含め、各教室で各講演等の合間に飲食をすることができます。ゴミは各自でお持ち帰りいただきますようお願い致します。近隣にコンビニエンスストアがございますので、こちらもご活用ください。

★大会参加費

- 学会員 2,000 円、一般参加 4,000 円、学生 1,500 円 になります。
- 日本自閉症スペクトラム学会員も 2,000 円です。
- 学会年会費は 4,000 円となります。
- 当日、学会員になられた方は 2,000 円でご参加いただけます。参加費 2,000 円と学会入会の手続き 4,000 円（合計 6,000 円）をお願いいたします。

★オンデマンド視聴

- オンデマンドのみ視聴を希望される方は Peatix で事前に申し込みの上、2000 円お支払いください。
- オンデマンドで視聴が可能な内容は、ポスター発表、基調講演、大会企画シンポジウム②になります。大会企画シンポジウム①及び自主シンポジウムのオンデマンド視聴は実施いたしませんので、あらかじめご了承ください。
- * 対面で学会に直接参加される方は事前申し込みの必要はありません。また学会に参加された方には無料でオンデマンド視聴ができるよう準備しております。
- オンデマンドのみ視聴の申し込みは以下のリンクからお願い致します。
- <https://sen-dohoku01.peatix.com/>
- 申し込みの締め切りは、10 月 7 日（月）18:00 です。

★その他

- 3 年間会費未納の方は学会除名対象となりますのでご了承下さい。なお、所属や住所等の変更がございましたら、速やかに学会事務局までご連絡下さい。

★お問い合わせ

- ◎大会および発表に関するお問い合わせは、旭川大会事務局(蔦森)までご連絡下さい。
- ◎学会に関するお問い合わせは、学会事務局長(齊藤)までご連絡下さい。

北海道特別支援教育学会第 18 回大会 事務局

〒070-8621 旭川市北門町 9 丁目 北海道教育大学旭川校

(旭川大会事務局) 蔦森 英史

TEL 0166-59-1395

E-mail sen.dohoku[アットマーク]gmail.com

([アットマーク]に@を挿入してください)

北海道特別支援教育学会 事務局

〒002-8501 札幌市北区あいの里 5 条 3 丁目 1-3 北海道教育大学札幌校

(事務局長) 齊藤 真善

TEL&FAX 011-778-0662

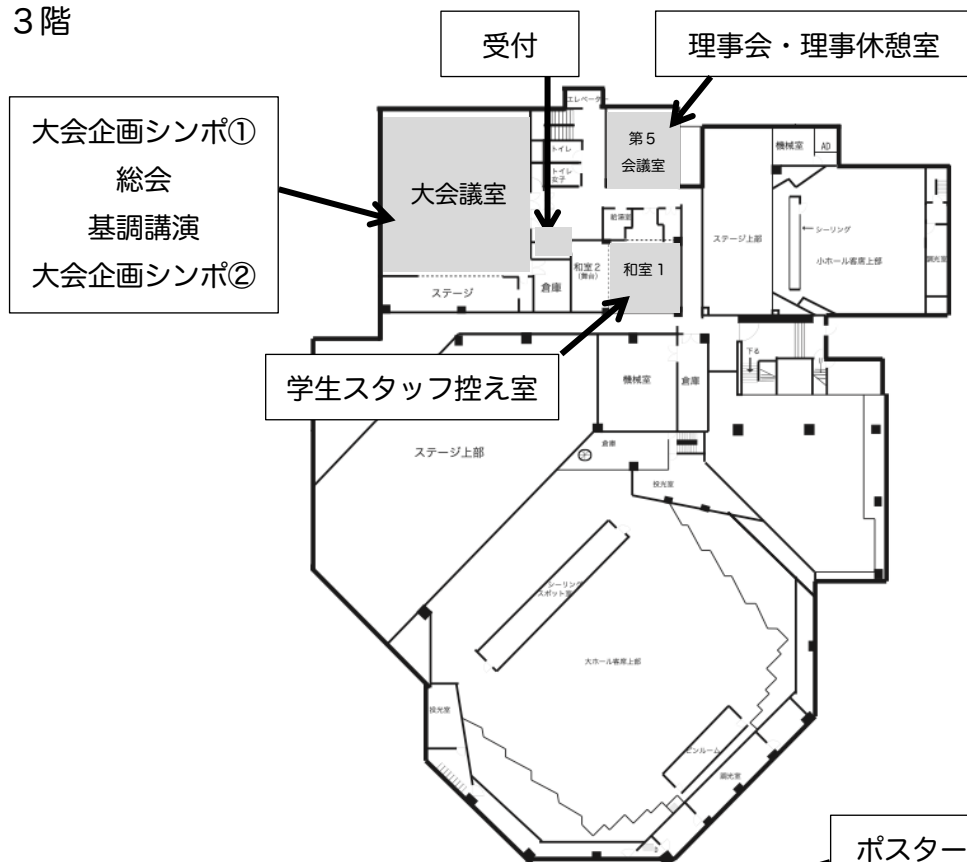
E-mail saito.masayoshi@s.hokkyodai.ac.jp

北海道特別支援教育学会 第 18 回旭川大会 HP

<http://hokutoku.net>

第18回北海道特別支援教育学会・研究大会
旭川市民文化会館 会場案内図

3 階



2 階

